

介護福祉士教育に於ける今日的課題

— アクティビティ・サービス（3） —

田 中 佑 子

はじめに

本年（2003年度）福祉学科は新入学生より介護福祉士養成講座のカリキュラムに合わせて、アクティビティ・ワーカー資格取得へ向けての講座「アクティビティ・サービス総論」を新たに開講した。開講に当たって「アクティビティ・サービスについて知っていることを記せ」というミニアンケートをしたが、白紙に近い状態が多く、未だ一般に認知されていない「言葉」であることを改めて、知らしめられる結果であった。

新入生とあって、「介護」それ自体への学習に取りかかったばかりであり、アクティビティ・サービスの理念と同時に介護観そのものをも育てていかなければならぬ時期のことである。

未だ十分な時間の経過を得ているとは言えないが、前期を終えた時点での課題を整理し、今後の授業展開の指針としたいと願い、課題の幾つかをとりあげて、述べてみたい。

— アクティビティ・サービスとは〔資料1〕 —

福祉サービス利用者に対して、少しでもいきいきと快く生活していただくことを願い、利用者への「心身の活性化」「生活の活性化」を支援することをいいます。

— アクティビティ・サービス協議会 —

1 介護福祉士への期待

介護福祉士養成に当たる教員は「良い介護」が提供できるプロを育てたいと願っている。

高齢化社会の到来を前に我が国は「介護」の専門職を福祉の分野で初めての国家免許を持たせて「介護福祉士」を誕生させた。昭和62年（1987）その法に掲げられた介護福祉士に対して期待されたことは、高齢や障害で不自由している人々の日常生活動作（ADL：activities of daily living）入浴、排泄、食事その他に対して介護を行う者ということであった。

— 介護福祉士とは —〔資料2〕—

第42条第1項の登録を受け、介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴、排泄、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと（以下「介護等」という。）を業とする者をいう。

— 社会福祉士及び介護福祉士法（昭和62年） —

当時の福祉は「措置」の制度のもと「食べて、寝る」という日常生活に不自由しないよう援助すること、「生命の維持」を主眼に、施すという意味合いが強かった。

1950年代初頭の北欧デンマークで、障害児をもつ保護者達の「わが子にいわゆる健常児（者）と同じようなノーマルな生活をおくらせたい」との願いの運動から起こった、「ノーマライゼーション（Normarization）」の思想は、1981年の「国際障害者年」を境に、わが国にも本格的に導入され、今日の福祉の基本理念となった。

平成12年（2000）、介護保険制度のスタートにより、福祉は「措置」から「契約」に移った。

選択権ができた、「良い介護を受けたい」「人間らしい普通の生活がしたい」「生き甲斐ある快適な生活を楽しむ」という願いを誰でも望んで良い権利である、と受け止める時代になった、と言える。

これらの流れを受けて介護福祉士に期待される介護は、当初の「生命」の維持へ視点を合わせた援助だけでは満足されなくなり、人間らしい当たり前の「生活」の維持を支える援助へと期待が拡大してきたと受け止めなければならない。

2 期待される「介護の質」とは

「良い介護」とは何か。

医師や看護師は対象者の「生命」を見つめ、疾病の治療や予防活動に当たるのが職務である。

介護福祉士やPT（physical therapist：理学療法士）、OT（occupational therapist：作業療法士）ST（speech therapist：言語聴覚士）は対象者（利用者）の「生活」を見据え、その人それぞれの人生の達成に手を差し伸べることを職務とする。言葉を加えるとPT、OT、STは先ず「障害」に視点にあわせ、障害を改善し生活の向上へと手を差し伸べることを職務とする。介護福祉士は利用者の日々の「生活」を見つめ、その人の障害や疾病からくる、ADL（activities of daily living：日常生活動作）の不自由さをアセスメントし、日常生活が円滑に営めるように、ケア（care）することを職務とする。さらに今日ではQOL（Quality of life：生活の質）も視点に入れ、生き甲斐のある「その人らしい生活」への援助が介護の方向であり、介護福祉士の職務と考えられるようになった。

この視点から「良い介護の条件」は以下のようになるのではないだろうか。

- ◆ 自立生活：IL（independent living）を目指す介護であること。
 - 不足したADLへ、熟達したプロの技術を以て、介護が提供されている。
 - 介護によってADL能力を低下させたり、自立を妨げるようなことはない。
 - ADL能力のアップのために適切なりハビリ（rehabilitation）を受けられる援助がされている。
 - ADL能力のアップのために福祉用具を適切に活用できるよう援助がされている。
- ◆ 「人間らしい当たり前の生活」「自分らしい生活」「快適ないきいきした生活」「安心・安住感」など生活の質：QOL（Quality of life）が大切にされていること。
 - 自己決定権が正しく行使できている。
 - 住環境へのこころ配りが適切である。
 - 楽しみや趣味活動、文化活動に参加する機会があり、生き甲斐のある日々が過ごせる。
 - 周囲の人々との人間的交流があり、社交による楽しさのある生活
 - 介護職員とのコミュニケーション、温かい人間関係がある

3 介護福祉士養成カリキュラム

◆ 「介護技術」「形態別介護技術」「リハビリテーション論」

介護福祉士養成のカリキュラムの中心には、日常生活動作（ADL：activities of daily living）への援助の理念と技術を習得するための専門教科が設けられ、座学と学内実技実習で理論と技術を学び続く450時間の施設実習でその技術の熟達を図られるように組まれている。また「リハビリテーション論」において障害を持つ人々への障害の改善や生活援助の技術や理念を学び、現在は福祉の考えの根幹に置かれているノーマライゼーション（Normarization）の思想についても学ぶ。「プロの技」を以てADLへの介護を提供できることは、当然の介護福祉士の基本的条件であると考えられている。

※ 1947年ニューヨーク大学のリハビリテーション（rehabilitation）科でADL（activities of daily living：日常生活動作）という概念が作られ、医学に「生活」の視点が導入された。しかし、リハビリテーション科は、QOL（Quality of life：生活の質）の概念をも正式に医学の世界に取り入れた。

◆ 「レクリエーション活動援助法」

人間の生活には「楽しみ」や「憩い」、仲間達と「遊ぶ」ことが必要であるとの考えであり、既に共通認識されている。当初から介護福祉士養成のカリキュラムには「レクリエーション指導法」が入っていた。しかし介護の対象者である多くの痴呆高齢者や老衰した超高齢者は、皆で歌ったり踊ったりして楽しめない、いろいろな文化活動で生き甲斐を享受することもできない。

痴呆高齢者や老衰した超高齢者の急増によって、これらの人々に対してのレクリエーション論の構築や、新しいケア（care）の確立が切実に求められるようになったと受け止められる。

現 NPO アクティビティ・サービス協議会の垣内芳子理事長等は日本社会事業大学（当時専門学校）に平成元年（1989）「福祉レクリエーション・ワーカー教育科」（夜間1年）を開設。平成4年（1992）には「福祉レクリエーション・サービス研究協議会」と称する運動体を起こし、これらの課題に取りかかったが、「レクリエーション」という名称がどうしても「キャンプに出掛けたり、歌ったり、踊ったり、ゲームしたりすること」という従来より広く我が国で認識されているものに傾いてしまう。そこから脱却するために、平成8年（1996）欧米諸国で一般に用いられている「アクティビティ・サービス」と名称を変更して、再スタートしたと聞く。アクティビティ・サービス（Activity Service）とは生活全般を整え、心身に働きかけ、活性化することによって、生活を快いものに、したいと願うレクリエーション論といえると思う。

人々が自分の人生に対して生活の質（QOL：Quality of life）を大事にしたい、どんなに老衰しても、痴呆になっても「人間らしい生活」「生き甲斐のある快適な生活」を送りたいとの願いが、当然であるとされる今日、これらの課題に対しの確に答えられる介護がこそ「良い介護」とされる。

利用者が良い介護を受けていると感じるのは正に、このような「生活の快」の感じられる介護であろうと理解できる。

介護福祉士養成のカリキュラムの中に当初から「レクリエーション指導法」を入れ、更に平成11年の

介護福祉士養成施設等における授業課目の目標及び内容の一部改正にともない、平成12年度（2000）から「レクリエーション活動援助法」と改正して対応しようとするほど重要視される所以であろう。アクティビティ・ワーカの介護現場での働きへの期待が今日的課題として意識されるようになったといえる。

4 「アクティビティ・サービス総論」と「KOMI理論」「課題学習」「福祉音楽論」

レクリエーションを「アクティビティ・サービス（Activity Service）」と言うあまり知られていない、言葉に変更してまで取り組む大きな意図は、従来のレクリエーションでは、享受できにくい痴呆高齢者や寝たきりの状態に陥った人々へのサービスを考えるためであると言われる。

本来レクリエーション（recreation）の意とするところは「生活の快」であるとNPOアクティビティ・サービス協議会の理事長垣内芳子氏は言う。だが我が国においては、例え「福祉レクリエーション」としても、どうしてもレクリエーションという言葉が、従来日本で捉えられていた考えに、引き寄せてしまう。レクリエーションに対する誤解を解き、本来の姿に戻したい。そのために、欧米諸国の施設で使われているアクティビティ・サービスという言葉に変えることに踏み切ったと聞く。

当福祉学科に於いて平成15年（2003）の新入学生に、初めて「アクティビティ・サービス総論」を開講し、筆者はその担任になった。授業展開のスタートはアクティビティ・サービス（Activity Service）とは何か、この未だ市民権を持たない言葉の説明から入らなければならない。そしてレクリエーションとは何かを理解し、慣習的に行われている我が国のレクリエーションへの誤解をとき、是正していかなければならない作業がある。これにはかなりの時間が必要であるが、ここの足固めが非常に大事であると改めて感じた。今回の授業の展開の中で気付いたこと、特に次の3つの教科が良い相乗効果をしていることを報告したい。

◆ KOMIチャートシステム・2001の活用

当学の福祉学科は第1期生より「実習指導」の教科の中で「KOMI理論」を導入してきた。

2回生を対象に「介護観」の育成と「介護過程の展開」ができることを到達目標にしている。現在は筆者が担当している。KOMIチャートシステムの記録用紙を活用して、利用者を介護の視点で観察し、情報を集め、アセスメントし、ケア計画をたて、実践し、評価修正して、再び介護実践へと進ませる、一連の流れである。

金井一薫氏の「KOMI理論」はケアの基本理念をナイチンゲールの看護理論に置いている。

人間という生命体の復元力の素晴らしさを信じて、「生活を整え」自己の復元力を高める。残された力、能力を拾い上げ、それを大切に「プラス思考のケア」を大切にする。生き甲斐を捜し出し、生きようとする「心」を大切にする。これらのことをケアの大切な方向軸とする看護理論である。これは正に、アクティビティ・サービスの目指すケアの方向軸と一致する。

介護実習に臨み、学生たちはKOMIチャートシステム・2001の記録用紙を手し、利用者の介護情報を集めアセスメントし、介護計画を立てようとする。情報はそのままアクティビティ・サービスの計画の資料としても活用できることは当然であるが、この介護の視点で立てられた介護計画には自然にアク

ティビティ・サービスを含んだケア計画になる。当学の学生たちの事例研究を見ると、介護のケア計画には、開講以前から当然のようにアクティビティ・サービスが含まれていた。

「KOMI理論」に合わせて「アクティビティ・サービス論」を学ぶことによって、介護の基本理念として、利用者の「生活の快」の重要性が意識される。人間の尊厳、その人らしさを大切にすることを無視しては進めない。介護観を育てるには良い相乗作用ををすると思える。介護の方向も同じである、単純に考えても少し視点を変えて2度学べる、なじみ易いし、深く取り組めると言える。

◆ 「課題学習」

「課題学習」ゼミについては、このレポートのシリーズで毎回触れ、前回にも述べた。

学生たちとより密に接し、細やかな指導がしたい、やる気を起こさせたい、「ケアの楽しさを気付かせたい」との試みからスタートしたが、その経過のなかでいつのまにか我々のテーマはアクティビティ・サービスに関するものに集中するようになったことは前述したとおりである。

平成15年度（2003）、5回目に当たる今年のゼミに、担当教員5人は以下のテーマで行った。

- 高齢者が歩んだ時代～高齢者と良いコミュニケーションを作るために～
- 「生活の快」を援助するアクティビティ・サービスを学習しよう
- 「明治、大正、昭和の子供の遊び」～伝承遊びのお手玉を通して～
- 楽しみながら学ぶ「音楽セッション」
- 楽しみながら出来る「リハビリ歌体操」

高齢者の若い日々の生活を理解することで、コミュニケーションが豊かになり、温かいものになる。筆者のグループは毎回「アクティビティ・サービスとは何か」文献学習をグループワークでするところからスタートする。「利用者さんと一緒に楽しみたい」「何かしようよ」「実習施設でセッションしよう」と今年はK施設へ出掛ける手はずをつけた。昔懐かしい玩具を使ったゲームを考えたり、歌体操や手話コーラスに使える歌を探すためにアンケートしたり、嬉々として取り組み、時間外や放課後遅くまで、自主的に、活発にグループワークしていた。最終は今年度は7月16日(水)学内の演奏ホールで1回生にも聴講させ福祉学科あげて発表会をし、締めくくった。前期半年、週2コマの短いものであるが学生たちの自主的な活動が年々増しているように感じられる。この教科、課題学習ゼミで、学生たちは、グループワークの楽しさと、レクリエーショナル・アクティビティの「セッション」を作り上げる楽しさを知る。またコミュニケーションの楽しさも体験学習する。その達成感とセッションや利用者さんとのコミュニケーションの楽しい思い出は学生時代の掛け替えのない思い出であると卒業生たちは回想している。学生たちは、自身の学生生活を大いに「活性化」させていると評価できる。

◆ 「福祉音楽論」

担当していないので十分に表現できないが、この教科は音楽が福祉サービスのいろんな場面で、活用されることに視点を置き、高齢者や心身の障害者に歓迎される歌を共に歌い、共に演奏できる力を養成し、思い出の歌から連想される過去の出来事や話題に、心から共感できる介護福祉士の養成を目指している。「音楽セッション」ができることも教科の目標の一つとして、楽器や歌を使ったセッションや適

したBGM (background music) についても学ぶ。学生たちに人気の高い教科である。

5 在学生の意識調査

今年、夏休みを控えて福祉学科1～2回生の学生にアンケートを試みた。

2回生は学園生活にも馴染み、それぞれの「顔」が見えはじめているが、1回生はまだまだ、90分の授業時間や耳慣れない医学用語、介護用語に戸惑いながら、4コマの講義でビッシリ詰まった毎日に悪戦苦闘している、この時期の学生たちが、これらの教科にどんなイメージで学習に取り組んでいるか探してみたいと試みた。アンケート内容は右に示した。またカリキュラムの進捗は以下に示す。

- ◇「アクティビティ・サービス総論」(初めての開講)
 - : 1回生のみ受講中(2回生なし)
- ◇「課題学習ゼミ」(第1期生より、今年5回目)
 - : 2回生前期のみ
 - 1回生は2回生の発表会もまだ聞いていない
- ◇「施設実習」(1～3段階に別けて)
 - : 2回生は第1段階(3週間)を2003年2月に終了
 - 1回生は施設実習の経験なし、学内実技実習のみ

アンケートの項目 ————— [資料3]

- [I] アクティビティ・サービス
 - ◇アクティビティ・サービスとはどんなサービスですか
 - ◇「アクティビティ・ワーカーの仕事」とんことを連想しますか
 - ◇アクティビティ・ワーカーのイメージカラーはどんな色ですか
 - ◇アクティビティ・ワーカーとして働いてみたいですか
- [II] 課題学習:ゼミ
 - ◇どんなことを連想しますか
 - ◇ゼミのイメージカラーはどんな色ですか
 - ◇課題学習ゼミへの期待や気分は(やり甲斐がある、楽しい)
- [III] 施設介護実習
 - ◇施設介護実習のイメージカラーはどんな色ですか
 - ◇施設介護実習への気分や期待は膨らんでいますか(実習に行きたい)

[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数)・田中]

アンケート調査から

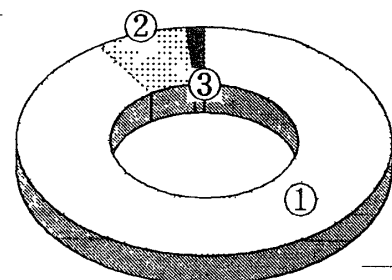
【I】「アクティビティ・サービス」

◀1▶「アクティビティ・サービス」に対する認知度
1回生は授業中で、ともかく全員回答欄にはきちっと記されている。が、意外にも2回生の殆ど(筆者の担当グループを除き)が聞いたことはあるが説明できないであった。筆者のゼミ担当グループはその文献学習から入ったので当然といえば当然であるが、毎年ゼミが行われ、学生たちは自主的で開放的に取り組み、アクティビティ・サービスの言葉が飛び交っていたにも関わらず、他のグループの学生は馴染みのない言葉として受け止めている。

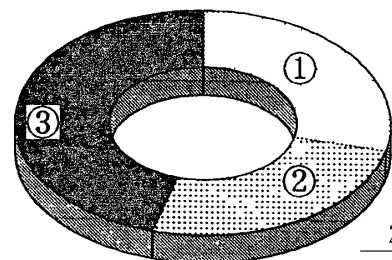
改めて「アクティビティ・サービス」の言葉の浸透性の薄さに驚かされた。この言葉への理解がNPOアクティビティ・サービス協議会の目指す活動に大きな課題となるだろうと改めて考えさせられた。

————— [グラフ1]

◆アクティビティ・サービスとは
どんなサービスですか



1回生



2回生

- ①: . 正しい回答 (心身の活性化生活の活性化を支援)
- ②: . 不十分回答 (レクリエーションやゲームに絞る)
- ③: . 分からない、記入なし

≪2≫ アクティビティ・ワーカーへの期待

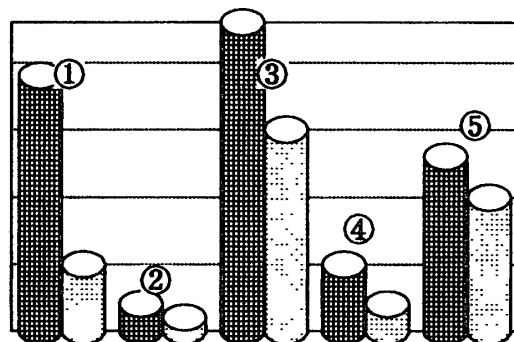
(1) ワーカーの職務は何だと思いませんか。

自由記載させた。予測以上にかなりしっかりと受け止めている学生が多い。

以下の5つにまとめ、〔グラフ2〕にした。

- ①日常生活のプログラムを立てる人
- ②活性化を引き出す、その情報を提供する人
- ③楽しませる役、レクリエーションを担当する人
- ④QOLやADLの向上やリハビリの手助け
- ⑤分からない、その他

〔グラフ2〕
◆ワーカーの職務は何だと思いませんか。
[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数)・田中]



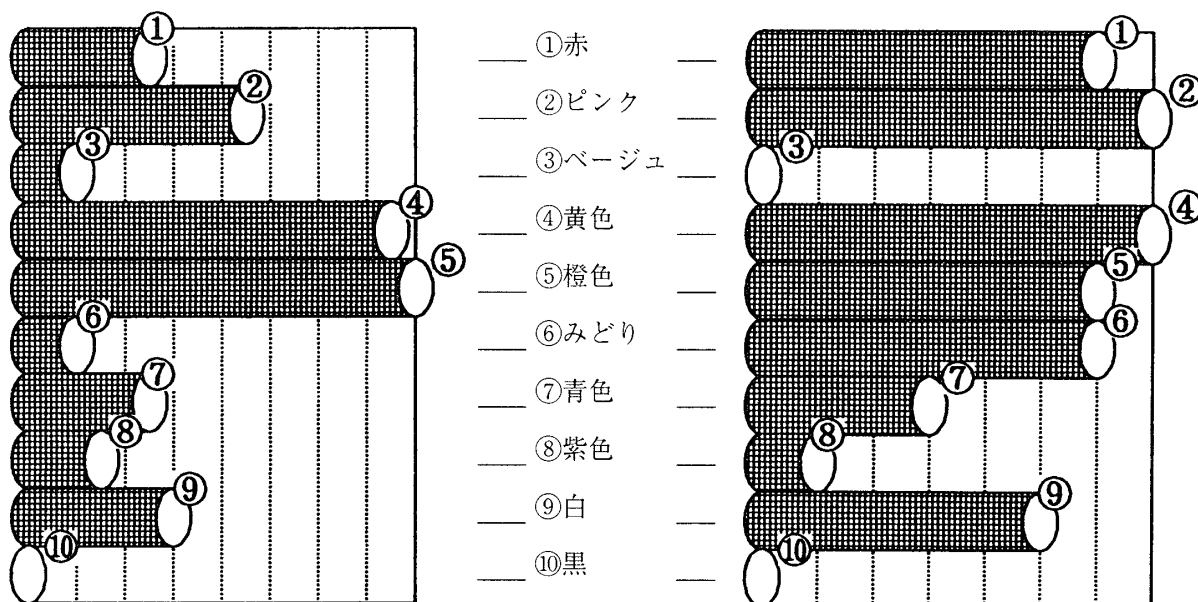
■ : 1回生 62人(人数)
■ : 2回生 35人(人数)

(2) アクティビティ・ワーカーに抱くイメージカラーについて、色を提示し、選ばせた。

当学の学生たちは、1. 2回生とも、明るい暖かいカラーで捉えている。

(以下のグラフ参照)

〔グラフ3〕
◆あなたのアクティビティ・ワーカーに抱くイメージカラーはどんな色ですか
[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数)・田中]



AWイメージカラー (1回生)

AWイメージカラー (2回生)

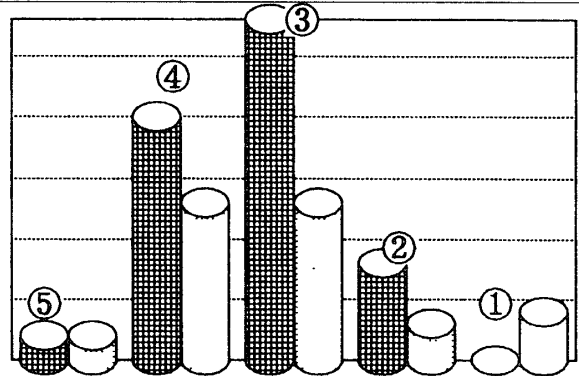
(3) アクティビティ・ワーカーとして
あなたは、働いて見たいですか。
これに対しても、まだよく分からないと
答えが多かったが、決して否定的ではな
かった。

- ⑤ 是非ワーカーの仕事がしたい
- ④ ワーカーになりたい
- ③ どちらでも良い、まだよく分から
ない
- ② 余り望まない
- ① したくない、絶対いや

〔グラフ4〕

◆アクティビティ・ワーカーとして、働いて見
たいですか

[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数) 田中]



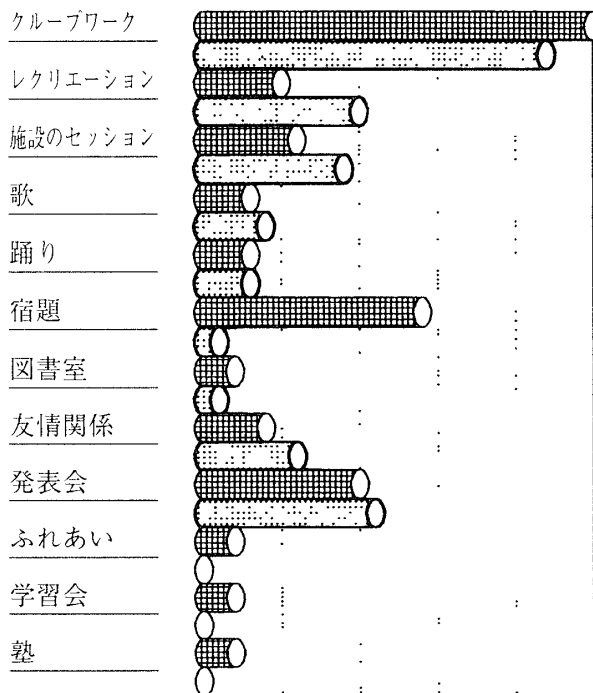
■ : 1回生 62人(人数)
□ : 2回生 35人(人数)

【II】課題学習：ゼミ

〔グラフ5〕

◆課題学習：ゼミと聞くと何を連想しますか
(複数回答可)

[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数) 田中]

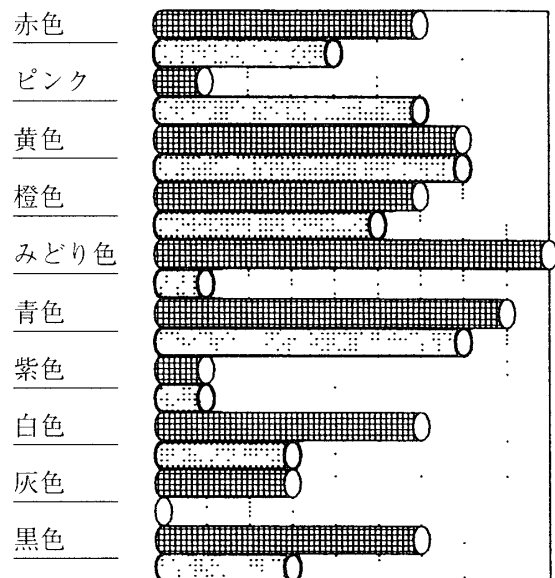


■ : 1回生 78人(人数)
□ : 2回生 67人(人数)

〔グラフ6〕

◆課題学習：ゼミと聞くとどんな色を連想し
ますか (イメージカラー)

[2003年・7月・福祉学科在学生・97(人数) 田中]



■ : (1回生) 53(人数) + 記入なし9
□ : (2回生) 34(人数) + 記入なし1

[グラフ7]

◆教科しての「課題学習：ゼミ」へのあなたの期待は

[2003年・7月・福祉学科在学生・92(人数)・田中]

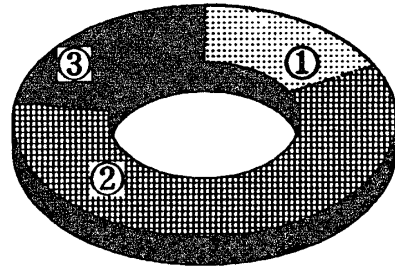
「課題学習：ゼミ」への期待

教科しての「課題学習：ゼミ」に対して学生たちはどんな感情で接しているだろうか。アンケートの結果を3つのグループに別けてまとめた。[グラフ7参照]

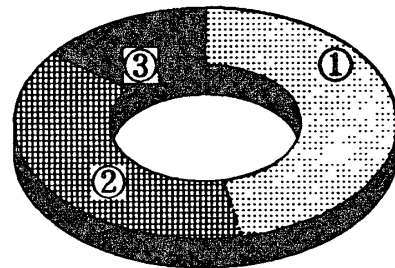
- ①: . . . 楽しいそう、期待している
- ②: ■■■ 分からない
- ③: ■■■ 気が進まない、難しそう

1回生は「分からない」が大半だが、決して否定的には捉えていない。

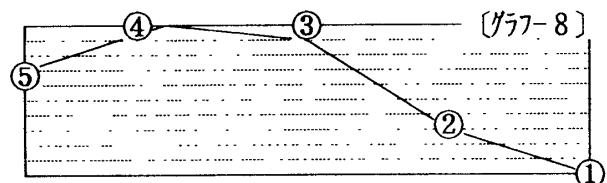
2回生は学習中で、発表会を待つのみ時期、半数が「楽しい」「期待している」と答えているのは嬉しい結果であった。さらに9月夏休み明け発表会後のアンケートでは、[グラフ8参照]5段階評価で、満足度が高いカーブであった。「忙しすぎた」「時間が足りない」が「達成感が嬉しい」とのようであった。



1回生



2回生



[グラフ8]

←満足<<ゼミの満足度：2回生>>不満足→

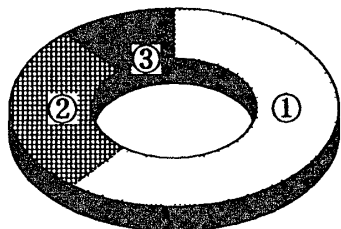
【Ⅲ】施設実習への期待

[グラフ9]

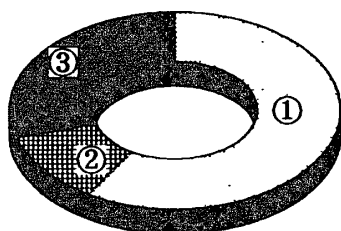
◆施設実習に対するあなたの気持ちを教えてください

[2003年・7月・福祉学科在学生・92(人数)・田中]

- ①: . . . 楽しいそう、期待している
- ②: ■■■ 分からない、何方とも言えない
- ③: ■■■ 気が進まない、難しそう



1回生



2回生

1回生は学内介護技術実習が終了しようとしているが、未だ施設実習は始まっていない。

分からないもあるが、大半以上が期待している。

2回生は、2月に第1段階の施設実習を終え、9月から第2段階、11月から第3段階、実習計画が迫っている。学生の大半は期待している。

ただ、経験のない1回生は無邪気に期待を膨らませているに比し、気を重くしている学生もいる。

6 考 察

アクティビティ・ワーカー資格取得へ向けての開講の第一義は、資格を1つでも多く持たせて卒業させてやりたい。その機会を設け、学生募集に繋がるように、との願いの結集の一つである。今回筆者がアクティビティ・サービス総論の科目担当に任ぜられ、改めて学生たちと共に学んで感じたことは、

- (1) アクティビティ・サービスの理念に向き合い、学ぶことは、「介護」そのものの基本理念に真剣に向き合うことに他ならない。
- (2) 人間らしく、その人らしい生活が快適に営めるような援助が欲しいと願うことが、一般化した今日介護福祉士はADL（activities of daily living：日常生活動作）への援助だけでは不十分である。QOL（Quality of life：生活の質）への援助を考えるケアアクティビティ・サービスの理念や知識や技術を学んでおく必要がある。
- (3) アンケートから当学の福祉学科の学生たちは
 - 「介護」に対してプラスイメージを抱き、暖かく、やさしい心で向かい合っている学生が多い。
 - アクティビティ・ワーカーに対して明るい暖かいイメージを抱き、高い好感度で興味を示している
 - 課題学習ゼミに対してもプラスイメージが強く、達成感を得ている学生が多い。

空き時間を活用して「福祉に興味を持たせたい」「介護の楽しさを気付かせたい」と我々教員一同で取り組んで来たことを、学生たちがしっかりと受け止めてくれている結果といえる。

※現在は平成12年度に増やされた「実習指導」の教科に組み込まれている。

「看護」から「介護」へ移って6年を過ごした筆者も、学生たちとの懸命な関わりの中で、介護の楽しさを沢山教えてもらった。「介護の視点」も私なりにようやく確信が持てるようになり始めている。「アクティビティ・サービス総論」を開講し、アクティビティ・ワーカー資格取得へ向けて動きだした方向軸は、正に奈良文化女子短期大学が掲げる『あたたかな人間性や広い視野、豊かな感性が生きる優れた介護をめざして』育成する介護福祉士像への方向軸と一致する、と結論づけて良いと思う。

おわりに

この夏、アクティビティ・ワーカー養成の教員に対する、ステップアップ研修会へ参加するため、群馬県の榛名町へ出掛けた。榛名山の南麓に広がる広大な敷地に点在する、近代的な、おしゃれな建物の数々、それらが社会福祉法人「新生会」（理事長：原慶子）の施設群で、3泊4日の合宿研修の会場であった。9種類のホームや診療所、温泉つき老人福祉センターがあり、丁度その時も原慶子氏の理想の福祉施設建築への夢を乗せて、古くなった特養施設を改築中（新しい場所に新築中）と案内をうけた。原慶子氏は『「自分の家」で暮らしているように、一人一人の生活が大切にされる生活ができる場を提供したい、《福祉は文化です》。』という。

宿泊させもらった施設は有料老人ホーム（健康型）の一角にある「高齢者開発センター」で、施設内の温泉では入居者と一緒になり、話が弾んだ。前の晩も友達同志らしい同じメンバー3人ほどと、喋りながら温泉を楽しんでいるのを見かけだが、65歳で入居したというその婦人（現在70歳）は終の住処

として選んできたと言う。『入居するならとことん年が寄ってからではダメ。新しい友達を作り、住み慣れ、そこの生活に楽しみを見つけ出す力が残っている間でなければネ』と言い放ったのが印象に残った。自分流の自由な生活ができ、ライフステージ（老齢化）に合わせて必要にして最小の、そして充分なる手厚い、適切な「プロの介護」が受けれる場所として、自分の意志で選び取ってきたと言う。老齢や障害によってADLが低下し、人間として「当たり前の生活」の実現が困難になってきたとき「プロの技と心」をもって介護にあたってくれる介護福祉士が側にいて、日々の生活には種々の楽しみ（サークルやクラブ、イベント）が身近にセットされ、自然環境にも恵まれ住み心地のよい『我が家』があればとの願いは、万人の共通のものであろう。

そんな願いを手に入れた人々を垣間見た思いのする研修会場であった。

参考・引用文献

- ・アクティビティ・サービス研究協議会（NPO アクティビティ・サービス協議会）編集
「アクティビティ サービス総論」 中央法規 2000
「A S N（アクティビティ・サービス・ニュース）」
- ・垣内芳子 廣池利邦 柏木美和子著「アクティビティ実践ガイド」 日総研 2001
- ・受託団体財ばけ予防協会 痴呆高齢者ケアプラン査定事業
「アクティビティケア実態調査」他調査報告書 5冊 1996～2000
- ・財日本レクリエーション協会監修 福祉レクリエーションシリーズⅠ Ⅱ Ⅲ
Ⅰ「福祉レクリエーション総論」 藺田碩哉 千葉和夫 他 中央法規 2001
- ・山本和儀、武原光志、森山雅志編 医歯薬出版株式会社 2000
「介護福祉士のためのリハビリテーション論」
- ・千葉和夫著 「高齢者レクリエーションのすすめ」 中央法規 1997
- ・千葉和夫責任編集 最新介護福祉全書⑦「レクリエーション援助」 メチカルフレンド社 1997
- ・金井一薫著 「KOMIチャートシステム・2001」 現代社 2001
- ・田中佑子著 「アクティビティケアの一考察」 奈良文化女子短期大学 紀要30号 1999
- ・村尾壽美・忠政敏子 福原信子・田中佑子・高桑慧子奈良文化女子短期大学 紀要31号 2000
「実習指導（演習）の展開～グループ別課題研究の試み～」
- ・忠政敏子 田中佑子共著 奈良文化女子短期大学 紀要31号 2000
「特別養護老人ホームの介護現況における～音楽療法の効用について考察する～」
- ・田中佑子 忠政敏子（発表）日本バイオミュージック学会関西支部 第2回学術大会
「介護福祉士教育におけるアクティビティケアへの取組み」 2000
- ・田中佑子 忠政敏子共著 奈良文化女子短期大学 紀要32号 2001
「介護福祉士教育に於ける今日的課題～アクティビティケア～」
- ・田中佑子著 奈良文化女子短期大学 紀要33号 2002
「介護福祉士教育に於ける今日的課題～アクティビティ・サービス～（2）」
- ・奈良文化女子短期大学福祉学科「課題学習」研究抄録 1 2 3 4 5期生 5冊 1999～2003